

3. アブ・シール南丘陵遺跡におけるイシスネフェルト墓出土人骨の再調査

および未盗掘集団埋葬墓出土人骨の予備調査

(1) はじめに

今回の2012年9月の調査では、2009年に行われたイシスネフェルト墓出土人骨（馬場 2010）の再調査と2004年に行われた未盗掘集団埋葬墓出土人骨（平田 2005）の予備的再調査を行った。イシスネフェルト墓出土人骨の再調査結果は、大枠としては前回の調査の暫定的結論と変わらないが、若干の修正と追加を含んだ結論となっている。同定された人骨は、それぞれの個体で、部位ごとに整列した写真図版として明示した。なお、統計解析の手法を導入したことにより帰属集団の推定が強化され、レントゲン撮影を行ったことにより古病学的判断の確度が高められた¹⁾。今回の報告では、前回の報告を補う形で記述したので、前回の報告（馬場 2010）と合わせて読んでいただきたい。未盗掘集団埋葬墓出土人骨の調査は、個体同定の予備的再検討であり、今後、平田との共同研究として精査をする予定である。

(2) イシスネフェルト墓出土人骨の形態および帰属集団の推定

①第1号人骨（推定年齢 10 ± 2.5 歳）（Figs.43, 44）

小児であり、ヨーロッパ系の特徴を備え、脊柱胸部の後弯という特異な病変を示す点では、前回の結論と変わらない。ただし、推定年齢は、前回は7～9歳としたが、今回は歯の形成状態や四肢骨の長さから10±2.5歳と判定した。

手足の細かい骨の同定を行ったので、全身骨の写真図版に加えてある（Fig.44）。椎骨の同定では、前回は4個の椎骨が見つからなかったが、散らばっていた破片を接合し、そのうちの3個が同定でき、保存部位の修正を行った。その結果、第5胸椎のみが欠損していることが判明した。この第5胸椎は、発掘時の写真を見ると、盗掘の際に破壊されてしまった可能性がある。前回、第1仙椎が腰椎化している可能性を指摘したが、今回、椎骨の同定が進み、逆に第5腰椎が仙椎化していると判断された。

脊柱胸部後弯（Fig.45）の原因は、前回は「ショイエルマン病」を想定したが、今回は、さらに「先天性後弯」の可能性も追加した。ただし、結核による脊椎カリエスの可能性はないと判断した。

②第2号人骨（35～40歳の女性）（Figs.46, 47）

大柄な壮年女性であり、ヨーロッパ系の特徴を示すという点で、前回の結論と同じである。年齢は、前回は30歳台後半から40歳台前半と推定したが、今回はさらに範囲を狭め35～40歳と推定した。身長は、前回は158～169cmと推定したが、今回は平均として163cmとみなした。

人骨の同定が進展し、右鎖骨が見つかり、左上腕骨が破片から組み立てられ、肋骨や手足の骨も大部分が同定された。

病変の古病学的判断も進めることができた。前回、右脛骨骨体下部の膨隆を骨髓炎と見なしたが、確証が得られなかった。今回、レントゲン写真を撮ったところ、骨髓腔の狭窄が見られ、骨髓炎との確定診断が得られた（Fig.48）。新しい知見としては、右手の母指基節骨基部に剥離骨折の治癒痕跡が認められた（Fig.49）。ここは短母指屈筋の停止部なので、右手の親指で強く握る動作を常習的に行って疲労骨折したか、あるいは親指に大きな力が急激に加わったために骨折したと考えられる。



Fig.43 イシスネフェルト墓出土第1号人骨（小児、 10 ± 2.5 歳）の頭蓋

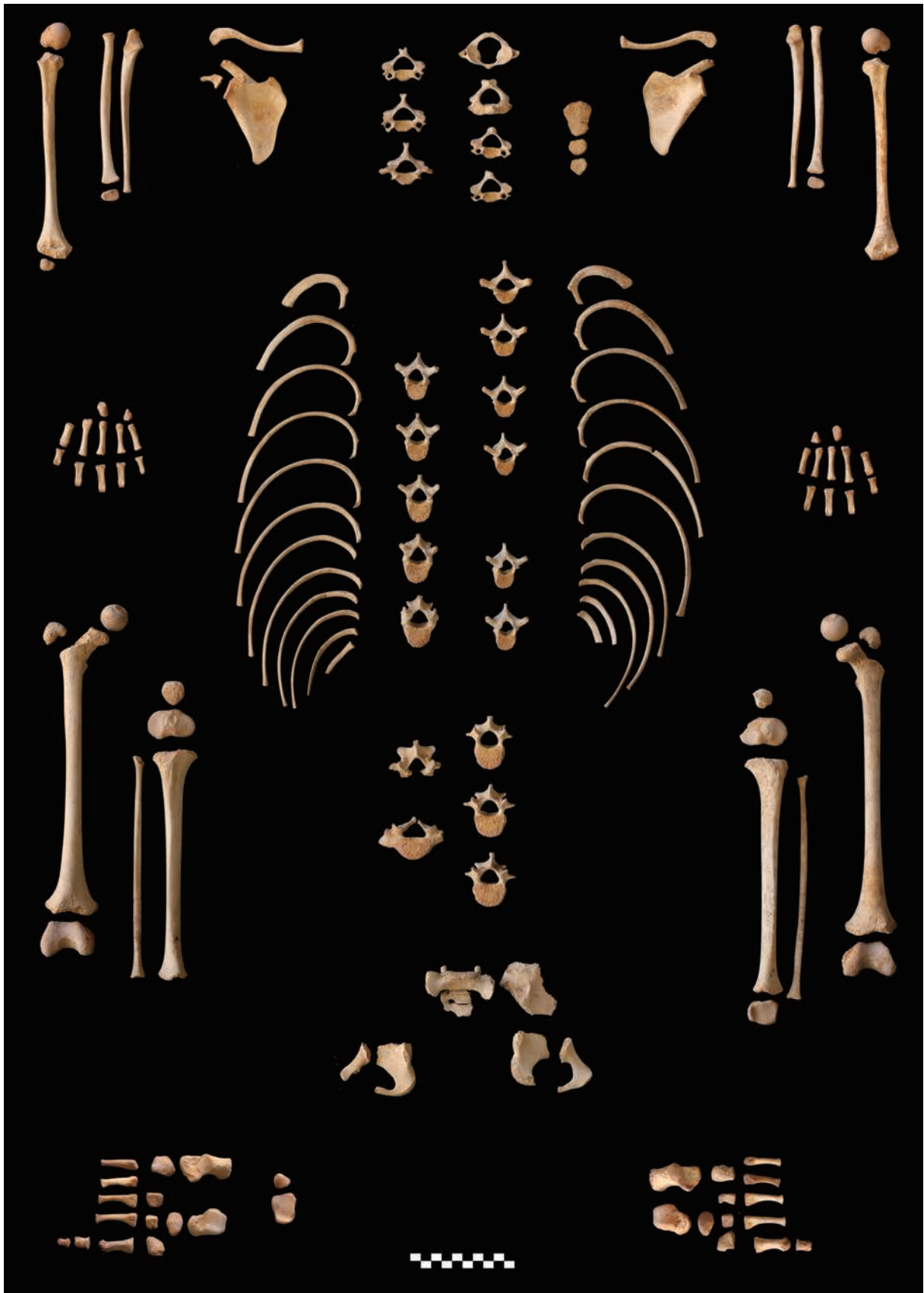


Fig.44 イシスネフェルト墓出土第1号人骨（小児、 10 ± 2.5 歳）の体幹体肢骨



Fig.45 第1号の胸椎部における強度の後湾

この個体の帰属する集団は、形態観察からヨーロッパ系と見なされていた。今回、頭蓋計測値からの帰属集団推定として、FORDISC 3 (Jantz and Ousley 2005) を用いて、既知の30集団のなかでどの個体に最も近い統計的に分析した。12変数を用いて28集団で分析した結果、この個体に最も近い集団は、現代の「エジプト人女性」という結果となった。

また、四肢長管骨の計測値から帰属集団を推定する方法として、日本人女性 (n=43)、ヨーロッパ系アメリカ人女性 (n=50)、アフリカ系アメリカ人女性 (n=50) から判別式を開発し、本個体がこれらの3集団のうちどれに当てはまるかを計算した。15変数による結果では、アフリカ系アメリカ人女性に近いという結果が出た (Fig.50)。これらを総合すると、第2号人骨の帰属集団は現在のエジプト人女性集団と類似するが、アフリカ系集団の影響を受けている可能性があると思なすのが妥当であろう。

③第3号人骨 (10歳台後半～20歳台前半の女性) (Figs.51, 52)

大柄な若い女性であり、アフリカ系の特徴を示す点では、前回の結論と変わりはない。推定年齢は、前回は20歳前後としたが、今回は幅を持たせて10歳台後半～20歳台前半とした。身長は、前回は160～166cmと推定したが、今回は164cmとした。

人骨の同定は若干の進展があり、前頭骨の一部、右橈骨の下半、左橈骨の一部、左第1肋骨、下顎歯4点などが追加同定された。

左大腿骨膝窩にある窪み状の病変は、前回は特定できなかったが、今回、繊維性骨皮質欠損という良性腫瘍と診断された (Fig.53)。左肩甲骨の肩甲棘基部の破断面は凹凸が激しく、生木を裂くような状態で破断されたことを示している (Fig.54)。

帰属集団の推定に関しては、この個体で利用できる方法としては、前述の四肢骨の15変数からの方法しか適用できなかった。その結果、本個体の帰属集団はアフリカ系女性と推測された (Fig.50)。

④第4号人骨(10歳台後半～20歳台前半の男性) (Fig.55)

極めて大柄な若い男性という結論に変更はない。年齢は、前は20歳直前としたが、今回は10歳台後半～20歳台前半とした。身長は、前は180～186cmとしたが、今回は183cmとした。

人骨の同定は多少とも進展し、下顎歯3点、左上腕骨の一部、左肩甲骨の一部、右腓骨、肋骨6点、右中足骨3点、左楔状骨2点、左立方骨などが追加同定された。

古病理学的判断としては、右腸骨翼の欠損部が、前は骨髄炎と診断したが、今回はレントゲン撮影の結果も合わせて検討した結果、骨嚢腫あるいは骨肉腫の可能性があると診断した (Fig.56)。右脛骨骨体の膨隆部は、前は骨髄炎と診断したが、今回はレントゲン撮影の結果も合わせて検討した結果、骨髄炎ではなく骨膜炎の可能性があると診断した (Fig.57)。若年にもかかわらず、左寛骨耳状面や左踵骨前距骨関節面に骨増殖が見られるので、強い運動負荷がかかっていた可能性がある (Figs.58, 59)。

人字縫合は明瞭に残存しているが、矢状縫合は消失している。この個体の推定年齢から判断すると、矢状縫合のみ癒合していることは不自然であることから、矢状縫合の早期癒合症の可能性はある。矢状縫合の早期癒合症は頭蓋が前後に長い「舟状頭蓋」を引き起こす場合が多いが、本個体では左右頭頂骨が断片的に残存しているだけであるため、舟状の変形をしていたかどうかは判断できない。左肩甲骨棘は生木を裂いたような割れ方をしているので、骨が水分を含んでいる状態で破断したと思われる (Fig.60)。

この個体の帰属集団は、前は、断片的な骨の形態が2号人骨と類似するためにヨーロッパ系と推定していた。今回、日本人男性 (n=50)、ヨーロッパ系アメリカ人男性 (n=50)、アフリカ系アメリカ人男性 (n = 50) の四肢骨15変数を用いる判別式を開発し、適用したところ、本個体はヨーロッパ系男性に最も近いという結果となった (Fig.61)。

⑤イシスネフェルト埋葬墓出土人骨のまとめ

イシスネフェルト埋葬墓出土の人骨は4体であり、それらの特徴を以下のようにまとめた (Table 3)。4体のうちでイシスネフェルトである可能性が最も高いのは、前の結論と同様に、2号人骨である。

Table 3 人骨の特徴

個体	性別	年齢	推定身長	帰属集団	病変
1号	不明	10 ± 2.5	不明	ヨーロッパ系	シヨイエルマン病あるいは先天性胸椎後弯症
2号	女性	35~40	163cm	ヨーロッパ系	右脛骨の骨髄炎、右手母指基節骨基底部の骨折治癒
3号	女性	15~25	164cm	アフリカ系	左大腿骨の繊維性骨皮質欠損
4号	男性	15~25	183cm	ヨーロッパ系	右腸骨の骨嚢腫あるいは骨肉腫 右脛骨の骨膜炎、矢状縫合早期癒合



Fig.46 イシスネフェルト墓出土第2号人骨(35～40歳の女性)の頭蓋



Fig.47 イシスネフェルト墓出土第2号人骨(35~40歳の女性)の体幹体肢骨



Fig.48 第2号人骨の右脛骨に見られる骨髄炎（実見写真とレントゲン写真の赤円は同じ部分を示している）



Fig.49 第2号人骨の右第1指基節骨基部に見られる剥離骨折治癒の痕跡

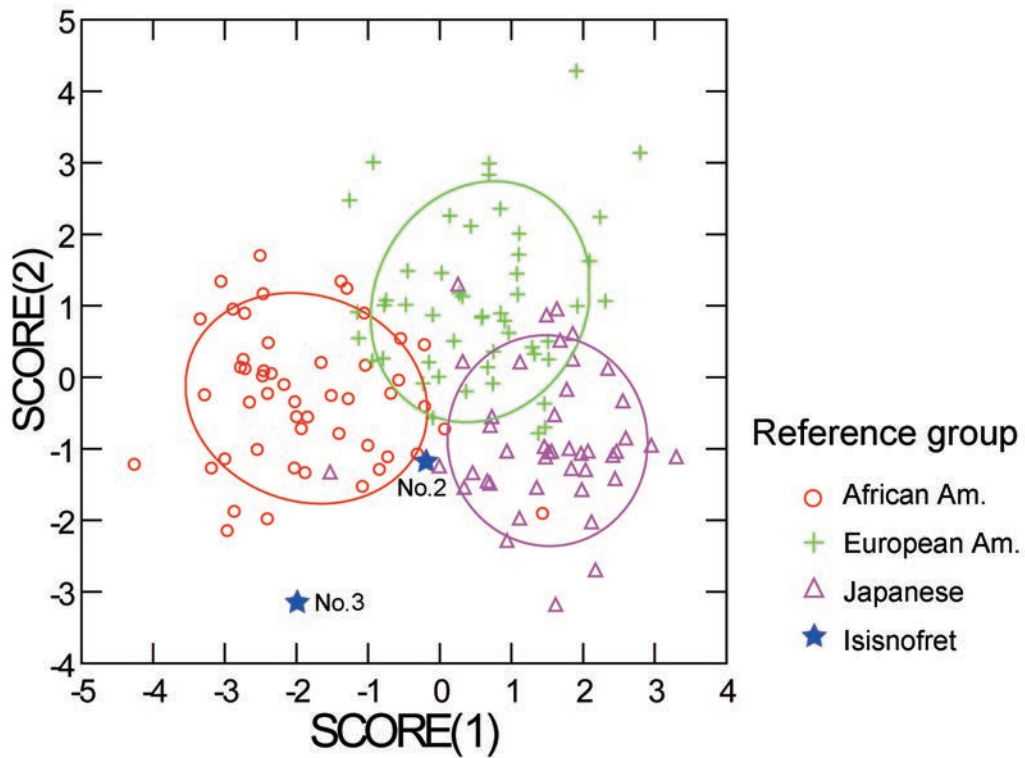


Fig.50 第2および第3号人骨の四肢骨計測値からの判別分析結果の二次元展開
 (判別式は、アフリカ系アメリカ人女性 (○)、ヨーロッパ系アメリカ人女性 (+)、
 日本人女性 (△)の四肢長骨計測値から計算した)



Fig.51 イシスネフェルト墓出土第3号人骨 (10歳台後半～20歳台前半の女性)の頭蓋骨



Fig.52 イシスネフェルト墓出土第3号人骨（10歳台後半～20歳台前半の女性）の体幹体肢骨



Fig.53 第3号人骨左大腿骨膝窩部に見られる骨吸収（繊維性骨皮質欠損と診断された）



Fig.54 第3号人骨の左肩甲骨棘基部に見られる鋸歯状破断面



Fig.55 イシスネフェルト墓出土第4号人骨 (10歳台後半～20歳台前半の男性)



Fig.56 第4号人骨の右腸骨に見られる骨吸収（骨嚢腫あるいは骨肉腫の可能性が高い）

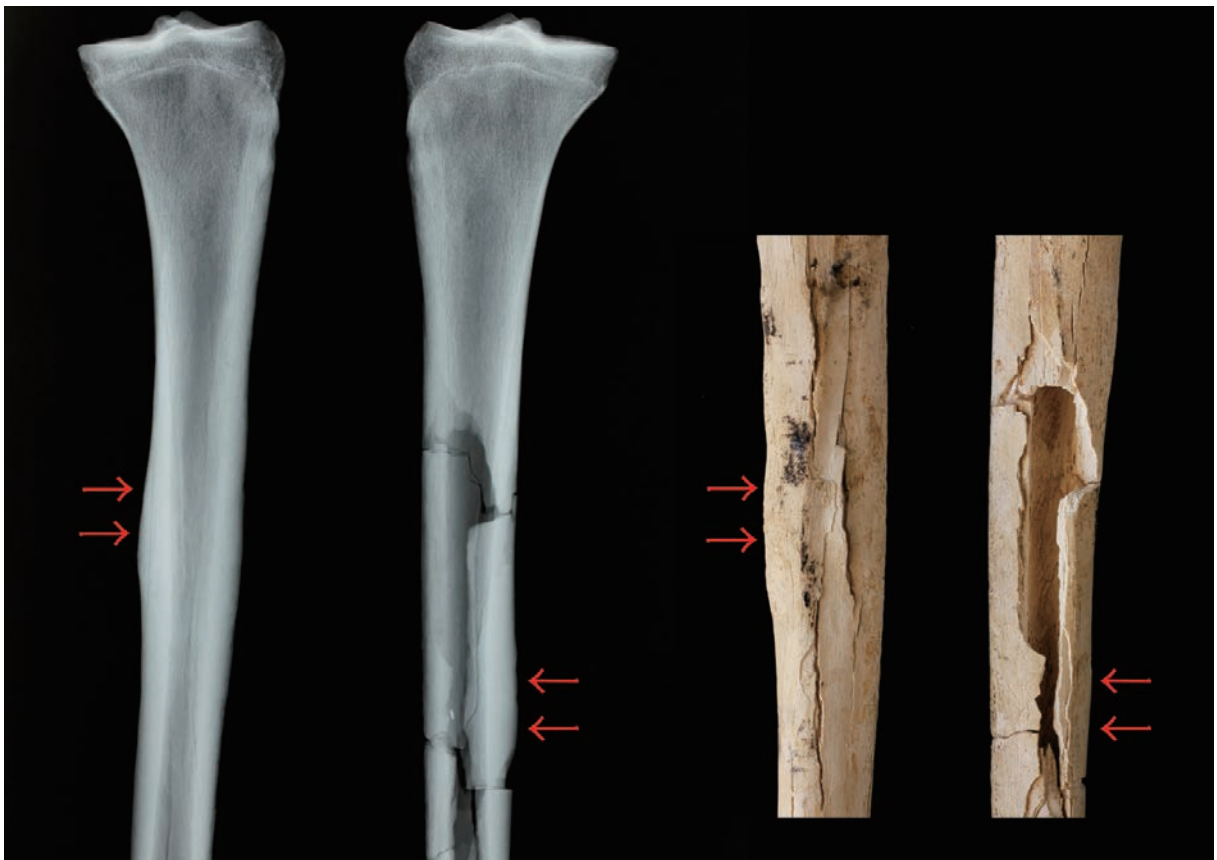


Fig.57 第4号人骨の右脛骨に見られる骨膜炎



Fig.58 第4号人骨の右腸骨耳状面に見られる変性



Fig.59 第4号人骨の左踵骨前端に見られる骨増殖



Fig.60 第4号人骨の左肩甲骨棘に見られる鋸歯状破断面

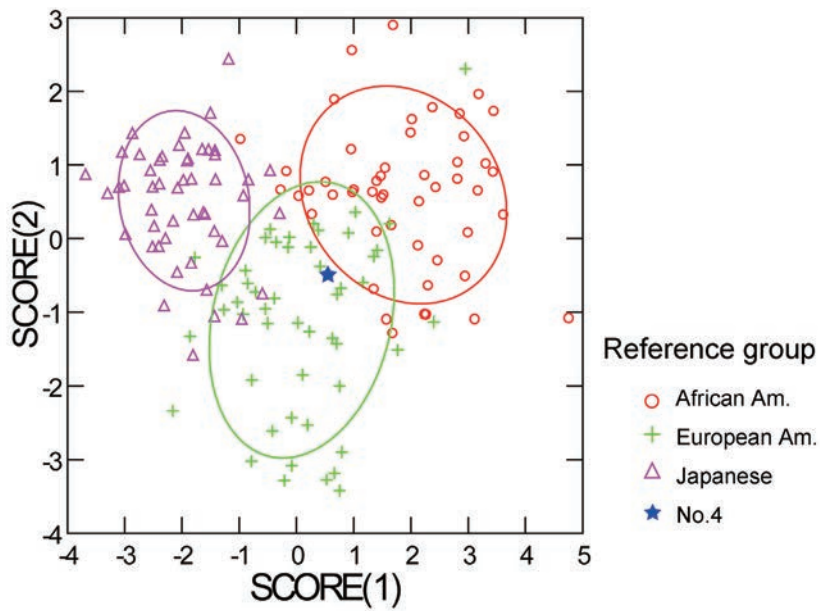


Fig.61 第4号人骨の判別分析結果の二次元展
 (判別式は、アフリカ系アメリカ人男性 (○)、ヨーロッパ系アメリカ人男性 (+)、日本人男性 (△) の四肢長骨計測値から計算した)

(3) 未盗掘集団埋葬墓出土人骨の基本的同定

この埋葬墓の木棺から出土した人骨は2004年に平田（平田2005）によって調査され、暫定的な同定・記載がなされていたが、今後の詳細な共同調査のために、今回、再検討した。その結果は、平田の結論とほぼ同様であるが、木棺の外に埋葬されていた遺物の残渣の中に幼児の人骨がわずかながら発見された。ここでは、個体のリストのみを示す。

①木棺外の人骨

AK12-O705 成人男性（30～40歳）

AK12-O763 成人女性（20～40歳）

番号なし（今回発見された人骨） 幼児

②木棺内の人骨

AK12-O802 小児（4±1歳）

AK12-O803 小児（6±2歳）

AK12-O804 小児（10±2歳、男性の可能性が高い）

AK12-O805 小児（9±3歳）

AK12-O806 小児（7±2歳）

AK12-O807 若い男性（15～19歳）

AK12-O808 成人男性（35～50歳）

AK12-O809 成人女性（25～50歳）

AK12-O818 幼児（今回の調査時には番号を確認できなかったが、前回の調査時に番号が記録されているので、同一個体と解釈した）

（坂上和弘・馬場悠男）

註

- 1) レントゲン写真撮影をしてくださいましたサリマ・イクラム教授（カイロのアメリカ大学）に感謝いたします。